

遠藤守信会長への資料説明に対してのご意見要旨

7月30日に第4回総合計画審議会全体会の資料説明をしました際に、いただいたご意見の要旨をまとめました。

ご確認ください。

総合計画

言葉について

人財や共創など辞書に出ていない言葉は、「人財」「共創」と表現し、「共創」などのように特殊な単語の位置付けを最初に出てくるところで表現するとよい。

意味が強調されるとともに、誤植ではないこともわかる。

「ヒト」は学問的な表現なので、「人」の方がよい。

前期重点プロジェクトについて

「地球環境保全プロジェクト」とあり、地球規模で考えることも大事であるが、「地球」ではなく、むしろ「地域」とするのはどうか。

地域からのボトムアップによる環境対策の取組み、自分たちの住む須坂、まず地域からの環境保全により全てのスタートで自分たちの環境がだんだん良くなる。環境市民をめざすという、須坂発の環境都市というイメージ。

地球がやるから須坂もやれというおしつけではなく、須坂をやって世界に先駆けて環境マインドを持った市民、市役所の取組みが大事。地域の自然から自発的に保全に取組み、その取組みが広がっていき地球規模になる。

自らの行動で、自分たちの環境を良くする。

「地域発」「ボトムアップ」というイメージでの環境保全の取組みはどうか。ローカルの環境保全が地球環境を良くする。

自分たちの地域の環境を自分たちで良くすることで、取組みに付随したビジネスにつながる、環境マインドを持った市民、子どもたちが育つという関連性。ごみ処理問題にも避けずに正面から取り組む姿勢が、負担に感じず環境マインドが根付いている市民性がある。廃棄物処理の取組みにもつながっていく。

知財活用プロジェクトという考え方はどうか。

「知財活用」＝「知的財産活用」、特許だけに限らない考え方。住む人が持っている文化であり教養であり、地域発展に反映すべきもの。須坂にはすごくあると思う。いかすことでそれが本人の生きがいにもつながる。

知財を認識する。知財は知識であり、文化であり、知恵であり、教養である。それは幸せにもつながる。

須坂には確かに大学はないが、独特な教養人、見識が高い。有形無形の知的財産を活用

しまちづくり、市民生活に反映させるという考えはどうか。地域や社会の発展の原動力に活用。

アメリカの社会は人を大事にする社会、個人の権利や考えを大事にするだけではない。教養や知識、知性を大事にする社会が独特の良いコミュニティをつくる。世界の一つのトレンドと言える。

須坂は教養を持った人がいるので、まちづくりに反映できるのでは。ただ、小布施や軽井沢などが独特の文化人が集うまちづくりをしているが。

縦割り社会、縦割り行政を打破するために、思い切って横串を通した横断型の組織強化を須坂は強めるといことを入れては。従来の施策の担当を超えて、市や市民の発展のエネルギーとなるように、既にやっていたとしてもあえて強調してその体制を述べてはどうか。

「全体力」という、個々の能力の足し上げだけでなく、プラスアルファの力を出すための方向である。連携や強調が新たな力を生み出すということを入れる。

これまでの社会では縦割りで十分機能していたが、時代の課題を乗り越えるために横のネットワークを強めるための新たな須坂の活力を生む。

「新たな須坂の活力を生む」この考えは大切。

「連携」「協調」これこそ「共創」の一番のコンセプトである。

須坂のアイデンティティは

今必要なのは、地域のアイデンティティを見出して地域発展のエネルギーにしていくことが大事なコンセプト。須坂のアイデンティティは何か？

知財ではないか、須坂の人は昔からそれを誉れとしている。大事にしてまちづくりをすすめる。

市民の横のネットワークの強さが独特の地域性を持っている。それを活かすことで、「都鄙格差（とひかくさ）」都会と田舎の格差が教育に反映する。社会の強い絆が子どもたちが安心して勉強できる環境となる。秋田は学力日本一、今は田舎の学力が高い。

社会の絆の弱さが都会の学力低下を招いている。子どもたちの安心感につながっていないのではとされている。

須坂のコアコンピタンス（他に真似できない核となる能力）は、小さすぎず大きすぎず田舎過ぎず都会過ぎないまちで、市民同士の横のつながりがある。知識教養を持った市民も多く、発展の力に入れ込むのは大事である。言葉で言うところありふれているが、事実はまだ触れていない。

意識の共有、「共有」が大事である。

外から来た人を排除するのではなく、新たな市民になっていただくことで、共に地域をつくっていくことが必要。

このコンセプトが盛り込めればと思う。

「地域再生」は、ローカルアイデンティティの再構築と言われている。「地域の個性の

再構築」コミュニティの利活用、個々の知的財産により地域発展にいかす。

地域発展の動き、「希望学」という考えがある。

「希望学」とは、具体的な何かを実現しようとする学問

希望の共有、地域内でのネットワークの形成、地域の個性の認識と再構築

須坂の特徴はそこにもあると思う、この考えも盛り込めればと思う。

将来人口について

決して須坂だけが人口減少しているのではないという説明も必要である。

人数ではなく、傾向として全国的な傾向と変わらないということグラフなどを使って述べては。特殊特別なまちではないということ。市民は悲観的になることはないと思う。

言訳ではなく、全国や県、地方都市の人口推移とあわせて市の人口の推移を示しては。

「魅力的まちづくりによる吸引力」、「人々を魅了するまちづくりのよる吸引力向上」などの考え方が入っているか。例えば、須坂の教育が特色あり、いじめが少ない、不登校が少ない、様々な住環境が人々をひきつける。教育だけに限らず、町の雰囲気。

須坂の人々はとても優しく受け入れてくれる、須坂に住んでみたいと思わせる。

ただのブランド力ではなく、一過性のものでなく「須坂に住みたい」と思える雰囲気。

一人ひとりの市民のつくりだす雰囲気、一人ひとりの市民の責任により、住んでみたいと気持ちが抱ける「都市の魅力がもたらす人口吸引力」、「地域の魅力がもたらす人口吸引力」

秋田のいち都市に先日行ったが、過疎だがとても住みやすい独特な雰囲気がある。そのまちの市民の満足度は高い。

市民がつくる魅力的なまちづくり。コミュニティの、まちづくりの仲間を増やす。色々な人が入ってきて地域が活力を持つことは必要、人口増にはつながらなくとも市の活力を維持するには必要なこと。

「人を魅了する須坂ブランド力の強化」「人を魅惑する田園都市須坂による吸引力の向上」

須坂の認知度、ブランドを高めることも盛り込んで。

「田園都市須坂の魅力の向上」須坂の良さを発信する取組み。

二世帯以上の世帯数は須坂で多いのか。

収入はひとりひとりでみれば田舎はとても少ないが、「イエコノミー」という言葉があるように、世帯全体の収入とすれば結構な額になる。田舎の豊かさはそういう面もある。

高齢者雇用の促進の考え方は良い。女性に対しても働く機会確保、就業促進も大切。

見やすさ、表現について

行政と市民の意思の疎通も大切である、そのためにも分かりやすい内容、分かりやすい表現によることが重要である。

レイアウトを市民と一緒に考えることは非常に良いことである。

また、せっかく市民と共に会議をやって意見を聴くことを行ってきたので、文字だけでなく写真をふんだんに入れた方がよい。

国土利用計画

継続的の表現について

「継続的」は「持続的」としてはどうか。「サステイナブル」、形を変えながら発展していくという意味がある。例えば、農業経営にしても、商業化するという概念も将来的には入ってくる。今の形をずっとそのまま引き継いでいく「継続的」ではなく、今の須坂の農業を発展的に考えていくかという「持続的」な考え方をに入れては。

「坂」の活用について

「水辺環境、坂などをいかした景観」とあるが、景観だけではなく健康やエネルギー、ポテンシャルとして「坂」は水辺環境よりも上位に来るのではないか。

須坂の独特の町の姿、四季折々の姿を見せる要素。

善光寺平の沖積地の軟弱な地盤ではなく、地震に強い強固な地形がリスク軽減の面でメリットがあるのでは。

昔は坂と言うとやっかいで疲れるなどマイナスハンデであったが、今は健康志向や「坂の上の雲」のように、魅力を感じイメージ的にプラス面である。坂を強調し、身近な坂を利用し昔からの人の生活を営んできた坂を活用した発展につなげて欲しい。

須坂、墨坂、坂田など坂のついた地名が多い、親近感があり魅力につながる。

坂の古い町並みの絵や写真などを活用してほしい。

表現例として、「蔵の町並みや水辺環境、そして"坂"を活かした」など。

都市経営

「地域経営」とは、地域のもつ資源を有効活用し、農業や産業、市民生活をマネジメントし発展していくこと。

地域の対象を須坂全体と捉えるか、高甫、日野、日滝など旧村単位をとらえるか。

地域の捉え方を区別する意味でも「都市経営」という言い方を使っても良いのでは。

ソフト面での取組みについて

- ・公共の新たな担い手
- ・連携促進
- ・人財の活用についても触れては。共創と人材とはコンセプトである。

ソフト面での取組みに、強調して触れてはどうか。